

伊豆諸島に生息していたニホンアシカについて

中 村 一 恵

(神奈川県立博物館)

An Essay on the Japanese Sea Lion, *Zalophus californianus japonicus*, Living on the Seven Islands of Izu

Kazue NAKAMURA

(Kanagawa Prefectural Museum)

Many so-called Todo-jima or Asika-jima remain in the adjacent seas of Japan (Table 1. & Fig. 1), where sea lions, namely Japanese sea lion (*Zalophus californianus japonicus*) or Steller's sea lion (*Eumetopias jubatus*) had clambered above the water on ledges and rocks. Such rocks called Asika-jima which distributes in the southern Pacific coast of Japan have been used apparently as habitats to rest or sometimes to breed by Japanese sea lions.

From published accounts of the Edo period the following information was obtained: A large number of the Japanese sea lion had bred on Onbase-jima and Inanba-jima, and also probably on Ōnohara-jima of the Seven Islands of Izu. It has been hunted to get its meat and oil by the native people from old times, but the population breeding in the Pacific side of Japan may have become almost disappeared in the 1900's, probably by over-killing.

日本沿岸各地にアシカ島およびトド島と呼ばれる地名がある。こうした場所はかつてアシカやトドなどアシカ科の海獣が上陸した所として古くから知られている。現在でも、北海道にはトド岩とか海馬（トド）島と呼ばれ、トド (*Eumetopias jubatus*) が常時上陸する岩礁がある (山中, 1983)。一方、本州太平洋南岸に点在するアシカ島と呼ばれる小島や岩礁は、かつてニホンアシカ (*Zalophus californianus japonicus*) が上陸した場所である (中村, 1989)。

これらの地名のうち、とくに本州の太平洋南岸に分布する地名に注目した西岡 (1949; 1972) は、こうした地名が残されたのはかつてアシカ類が本州まで南下したことを示すものであり、それを長期的な気候の変動を示す証拠の一つと考えた。そこでは、「アシカのような寒流系の動物」が南下できたほど当時 (江戸時代末期) は寒冷な気候下にあったとし、アシカ島からアシカが消えたのは気候の温暖化によると結論された。これに対し中村 (1989) は、アシカ島という地名が残されたことと、気候の寒冷化との結びつきは希薄とし、アシカが本州から消失した主因は乱獲によると結論した。西岡のほかにも、アシカを「北方・寒流系の動物」とみなし、気候の寒冷化と結びつけた論考が一部の歴史学者や考古学者によって発表されている (水野,

表1. 日本近海におけるトド島およびアシカ島一覧（中村1989を改変・加筆）

No.	位 置*	名 称	備 考
1.	岩手県大船渡市	海馬（トド）島	
2.	岩手県気仙郡	トト島	
3.	岩手県宮古市	鮫（トド）ヶ崎	
4.	岩手県宮古市	鮫登（トド）島	
5.	青森県八戸市	トド島	
6.	青森県上北郡六ヶ所村	鮫（トド）島	
7.	青森県下北郡尻屋崎	トド島	
8.	日高支庁新冠郡	海馬岩	
9.	釧路支庁釧路郡	トド岩	
10.	根室市根室半島	トド島	
11.	歯舞諸島多楽島沖	海馬島	
12.	目梨郡知床半島	トド岩	
13.	斜里郡知床半島	鮫（トド）岩	
14.	宗谷郡猿払村	海馬島	
15.	サハリン南部	海馬島	別名モネロン島
15.	礼文島	海馬島	
17.	増毛郡増毛町	海馬島	
18.	浜益郡浜益村	トド岩	
19.	小樽市	トド岩	
20.	古平郡古平町	トド岩	
21.	奥尻島	海馬島	
22.	松前郡松前町	海馬島	
23.	青森県下北郡焼山崎	海馬島	
24.	青森県西津軽郡深浦町	海馬島	
25.	山形県酒田市	トド島	現在の飛鳥
26.	新潟県両津市	トド岩	別名海驢（トド）島
27.	石川県能登半島	鮫礁（トドグリ）	
28.	福井県丹生郡越前町	トドグリ	
29.	京都府	トドノタナ（店）	
30.	島根県簸川郡大社町	等々（トド）島	現在の臚（とも）島
31.	島根県八束郡美保関町	等々島	現在の御前島
32.	徳島県阿南市	アシカ落（バエ）	
33.	和歌山県日高郡由良町	海獺（アシカ）島	または葦鹿島・阿志加島
34.	和歌山県西牟婁郡すさみ町	アシカ島	
35.	和歌山県串本町潮岬	アシカ島	
36.	和歌山県串本町萩尾	アシカ島	
37.	和歌山県串本町出雲崎	アシカ島	
38.	和歌山県東牟婁郡太地町	アシカ島	
39.	愛知県渥美郡伊良湖岬	アシカ島	
40.	伊豆諸島大島泉津	海驢（アシカ）島	別名アシカ根
41.	伊豆諸島式根島	海驢（アシカ）立鼻	
42.	伊豆諸島式根島	アシカ穴	
43.	伊豆諸島神津島	アシカ島	別名恩馳島
44.	伊豆諸島八丈島油戸	アシカ根	
45.	神奈川県横須賀市	海獺（アシカ）島	または海鹿島
46.	千葉県安房郡鴨川市	海獺（アシカ）島	
47.	千葉県夷隅郡勝浦町	アシカ島	
48.	千葉県夷隅郡大原町	アシカ島	
49.	千葉県銚子市	海獺（アシカ）島	または海鹿島・葦鹿島

*太平洋側東北地方・北海道、オホーツク海、日本海、太平洋南岸の順に配列。

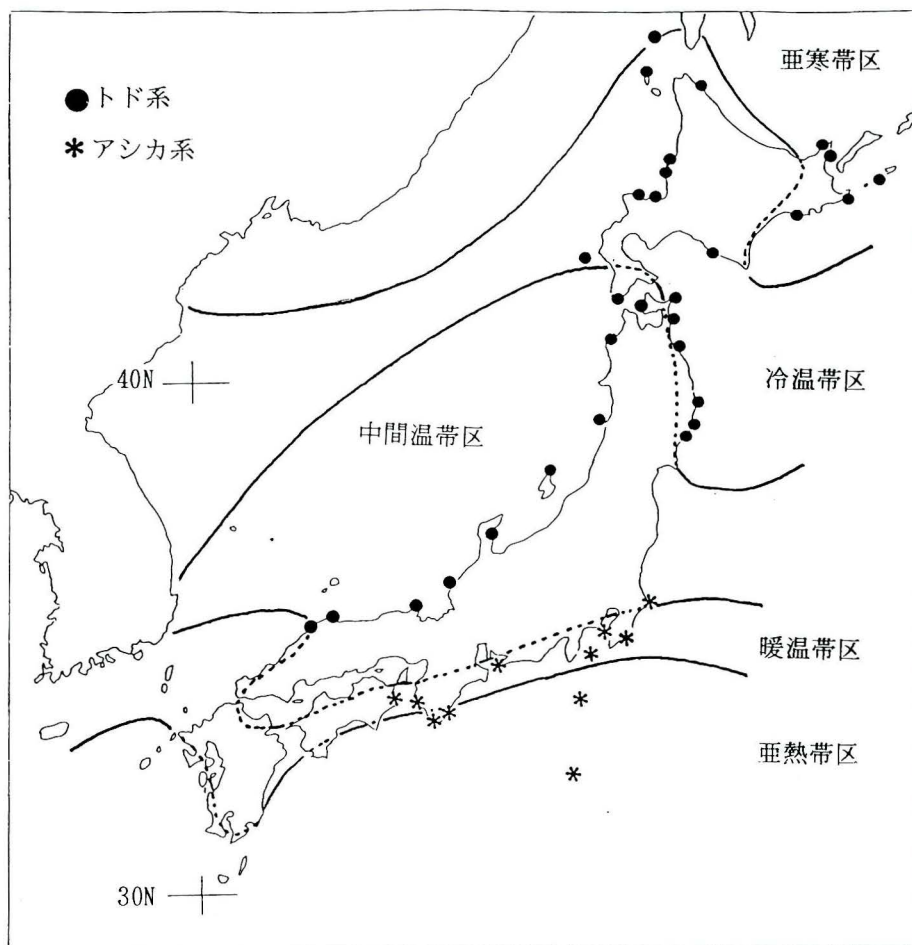


図1 日本沿岸におけるトド系およびアシカ系地名の分布。生物地理区分は西村（1981）による。

1970；国分，1975）。

西岡が指摘した気候の温暖期，寒冷期のいくつかは，確かに存在することが実証されるようになった。だが，アシカに限れば，それは広義の温帯から亜熱帯にかけて生息する暖流系の動物であり，西岡ら文科系の学者が前提として考えたような「北方・寒流系の動物」ではなく，気候の長期的な変動と結びつけることに無理があろう。ニホンアシカ（以下アシカ）は土着の海獣として日本近海に生息し，日本海側においては少なくとも1940年代まで生存していた（中村，1989）。

日本海の竹島にアシカが繁殖していたことはよく知られているが，日本海ばかりでなく，太平洋側にもアシカの繁殖地があったと考えられる。先報（1989）でこの点を示唆したが，江戸期から明治期にかけて伊豆諸島のいくつかの岩礁小島にアシカが繁殖していたことを指摘できるさらに有力な古記録を本稿で提示する。

トド系およびアシカ系地名の分布について

小野蘭山 (1729-1810) の『重修本草綱目啓蒙』では、「海獺」(現在のアシカを指す)の異称として、「ミチ、ウミヲソ、ウミウソ、ウミカプロ、アシカ筑前、アジカ豫州、トド能州」をあげている。ミチ(美智)はアシカの古名であり、ウミヲソやウミウソはカワウソ(川獺)に対する海のヲソまたはウソ(獺)である。ウミカプロは「海禿」の意であるが、カリフォルニアアシカ (*Zalophus californianus californianus*) の成熟した雄の額はこぶ状に盛り上がり、その部分の毛が銀白色に変化するところから、雄の白い頭を禿と見た表現ではないか(伊藤, 1979)、海面からもたげた頭が坊主頭に見えるところに由来した表現ではないか(山下, 1990)などの解釈がなされている。

以上のような異称のうち、もっとも注目すべき点は、筑前(現在の福岡県の一部)や豫州(現在の愛媛県)ではアシカまたはアジカと呼ばれていたが、日本海の能登地方ではアシカのことを「トド」と呼んでいたことであろう。

天保9年(1834)に著された『能州漁業図説』(歴史博物館・成興閣所蔵)には、「胡擯打」と題した「トド獺」が描かれている。それに次のように記述されている。

「とゞ者入海中七ツ嶋へ上がる也、其頃名舟村より狩人ども渡り鉄砲に打なり、嶋の絶頂へ上るを鉄砲に打たばころがり落ちると次の胡擯又其所へ上る也、鉄砲に憶えぬものにて頭に居候と、打落され候得ば、次に頭へ上り追ら打るゝなり」。

この絵からこの海獣がトドであるのか、アシカであるのかは判断できないが、この海獣が銃声を恐れていなかった様子が描かれていて興味深い。

七ツ島は輪島市の北方海上約20~25kmにあり、東西5km、南北5kmの範囲に散在する小島群の総称である。現在いずれの島も無人である。七ツ島の「胡擯(トド)獺」は石川県鳳至郡名舟村の漁民が行ったが、その目的は主に油を採るためであり、その獺期は八十八夜から夏土入まで(現在の5月後半~7月後半)が中心であった(左古, 1985)。これはアシカの繁殖期(5~6月に出産し、6~7月に交尾する)に相当する。トドも5~6月に出産するが、トドの繁殖地が北方亜寒帯域(現在は北海道以北)にあることを考えれば、七ツ島に上陸していた海獣はアシカであったと判断するのが妥当である。七ツ島における「トド獺」がトドではなくアシカを指した可能性があることは小島ら(1978)によっても指摘されているが、筆者も同感である。七ツ島でアシカが繁殖していた可能性は高いと思われる。

「トド」が「アシカ」の別称であった可能性のある地方が日本海沿岸に一つでもあれば、地名や異名だけでかつての分布を云々することは危険である。池原ら(1990)は、「佐渡にはトド岩があることから、古くから(トドが)来遊してくるようである」と単純に述べているが、能登ではトドかアシカの異称であるなら、「トド島」イコール「トドが上陸した島」とは限らなくなる。この点に関しては伊藤(1979)によってすでに指摘されているが、池原ら(1990)ではそれが生かされていない。能登とは地理的に近い佐渡においてもその可能性はある。田中葵園(1782-1845)の『佐渡志』には、「胡擯あり、方言とゞ又あしかともいふ、加茂郡鷲崎の海上にとゞ島あり、群をなして能眠る膩多し」という記述がある。

日本近海におけるアシカ島とトド島およびそれらに類する地名を表1に、その分布を図1に示す。韓国にもアシカ島に相当する地名がある。可支島がそれで、「可支」は海鹿(Kasi)を意味する。その位置は明確ではないが、日本海にある鬱陵島東北岸近くの小島と推定されている(川上, 1966)。

それぞれの地名系がすべてトドとアシカの過去の実際上の分布を示すものではないが、アシカ系は銚子以南の黒潮に洗われる地域に、トド系は三陸以北の親潮に洗われる地域にそれぞれ集中して成立し、西村(1981)による生物地理区分でいえば、トド系は冷温帯区から亜寒帯区、日本海では中間温帯区に、アシカ系は暖温帯区を中心にそれぞれ成立している(図1)。トド系およびアシカ系の分布で注目すべきことは、日本海におけるトド系の地名がかなり南偏している点である。この点が太平洋側と大きく違っているところである。一方、トド系(表1. No.1-31)とアシカ系(No.32-49)とが狭小な中間温帯区をはさんで南北に明瞭に二分されているのが太平洋側の特徴である。

これまで述べてきた資料に基づいて推論すれば、とくに日本海側に残されたトド系の地名のいくつかは、トド(*Eumetopias jubatus*)が上陸した島を指したのではなく、主としてアシカ(*Zalophus californianus*)が上陸した岩礁小島を指していた可能性が大きいと思われる。これに対して、伊豆諸島をはじめとして太平洋南岸には、日本海に残されたようなトド系の名称に相当するものはほとんど見られない(図1)。また、日本海側におけるトドの分布は太平洋側に比較して南偏し、沿海州沿いに朝鮮半島のウルサン(北緯35度34分)まで達するされるが、太平洋側では銚子以南の黒潮卓越海域にトドが出現することはほとんどない(NISHIWAKI, 1967)。したがって太平洋南岸に関しては、日本海で生じるような混称の問題は少なく、アシカ島またはアジカ島と呼ばれる地名はアシカの上陸した場所とみてよいと考える。

「トド」はアイヌ語起源と考えられている。しかしこれが過去に確かに現在の動物学で言うところのトド(*Eumetopias jubatus*)を指したものであったのかは検討を要する問題である。「トド」の原意についてはさらに多くの資料を踏まえた時代考証を行う必要がある。

伊豆諸島に生息していたアシカについて

伊豆諸島にはアシカ島およびそれに類する地名が与えられた場所が少なくとも5カ所ある(表1. No. 40~44)。大島のアシカ島(表1. No. 40)については、幕医野呂元丈の『大島見聞録』(享保9年)に、「アシカ島とて岩の出たる有、アシカ多く群って見ゆ」という記述がある(坂口, 1980)から、太平洋本土南岸に残されたアシカ島同様、伊豆諸島においてもこうした地名はアシカが常時上陸した岩礁であろう。日本海の竹島は最後までアシカが生存した所であるが、ここでは洞窟を利用して生息していたことが知られている(中村, 1989)。式根島に残るアシカ穴という地名(表1, No. 42)もアシカが住んでいた洞窟を意味したものかもしれない。そしてアシカ島の一つ、恩馳島(表1. No. 43)はアシカが繁殖していた群礁であった。

羽倉蘭堂(1790-1862)の『南汎録—伊豆諸島巡見日記』にアシカに関する重要な記録が見られる。蘭堂は文政11年から天保11年までの13年間(1828-1840)、伊豆諸島の代官の職にあった人である。この間、天保8年(1838)に伊豆七島の巡視を命ぜられてから翌9年に帰国報告するまでの7カ月の見聞を綴った日記である(金山, 1985)。

蘭堂は恩馳島(神津島の南西約4 kmにある群礁)に上陸し、実際にアシカを目撃した。

「閏四月二十五日(6月17日)下午小舟に乗って、筍島・烏帽子岩を見た。恩馳島はもっとも大きく、周囲一里余、石の磯があり、アシカが群れ棲んでいる。脂気が強く歩行困難である。自分は釘のついた鞋をはいたので、岩を踏んでもつまづかなかった。従者と銃でアシカを打ったところ、洞の口にいた乳のあるアシカが悲しげに叫んで去らないので、それを放すように命じた」。また、羽倉蘭堂は神津島の天上山に登った際、「山頂と恩馳島とは互いに数十里を距って

いるのに、アシカの声は耳のそばで聞くようである」と述べている。この文面から推定するに、アシカが恩馳島に繁殖していたことは確実であろう。蘭堂に随行して写生図を担当した長谷川晋吉(1820-1862)による「神津島おんばせ島海獺の図」が残されている。

さらに蘭堂は大野原島(三宅島の南西約9 kmにある群礁)にも上陸し、アシカを間近に目撃している。

「閏四月二日(5月25日)小舟で三宅島の南の方を觀に行つた。三つの大岩は海面を抜くこと一千尺あり、その形状が刀を立てたのに似ているのを子安根といい、四角で幾段にもなり、算盤の玉を重ねたようなものを大根といい、鋭く赤土色で、四つの洞窟があい通じ、中が交錯した道となっているのを海老根という。舟が洞内を通ると、艀の響きがたちまち鐘や磬の音をなした。三つの岩を三本岳、または大野原島といい、百余里の外からこれを望むと、大海の鼎の脚のように立ち、南方の海を行く舟は、これを目標としている。この岩にはアシカが多く棲み、舟を見ると、驚いて逃げ、海底で鳴く声は絹を裂くようである。そこで大根に登って弁当を開いた。アシカは肥えていて、色は漆のように黒く、太陽に当たると甚だ臭い。」

この文面からは、アシカが大野原島に繁殖していたことは読み取れないが、上陸の時期がアシカの繁殖期に当たっていたところから、恩馳島同様、この島がアシカの繁殖地であった可能性は大きいと思う。

伊豆諸島代官・三河口太忠は寛政八年(1796)に伊豆諸島の巡見を行つたが、それに随行した文人・小寺応斎が綴った紀行文(『伊豆日記』)の中にも、大野原島にアシカが生息していたことが記述されている(金山, 1979)。

蘭灘波島(三宅島の南約50 kmにある群礁)もアシカの繁殖地であった。

三島勘左衛門による『伊豆諸島風土細覧』の成立は、その自序によれば寛政12年(1800)である。勘左衛門は寛政3年(1791)4月に新島に渡り、新島から故郷(飛驒高山)に帰って2ヵ月後の寛政12年3月に著したものである。帰郷してまもなくの著であり、新島に関する見聞がはっきりと記憶に残されていて、その記述は比較的正確と考えられる貴重な文献である(桑谷・谷川, 1968)。

アシカが繁殖していたことは以下の文面から読み取れる。それには幼獣の大きさの記述もなされている。

「新島より海上六里を離れ三宅の中間にいなばと言岩山あり、此所に海鹿といふ者沢山也、魚にあらず太き毛生足り、叫ぶ声海上二里に響く、頭は犬に似て真黒也、腹も獸の如し、手足はなく尾鰭あり、鰭の厚さ人の手の厚さ、尾の厚さは人の足の厚さほど有、形は魚の尾鰭にたがわず、浪の上を走る事鳥の如し、子を愛し岩の峪(はざま)に寝て居るを船にて忍び寄り鐵鎗(もり)を似て突取るに、子を惜て動事なし。取放せば中々手に合わず、大は里狗ほど也。」

伊豆諸島のアシカが油を採るためや食用として捕獲されていた。このことは、秋山富南原(1723-1808)の『伊豆七島志』や三島勘左衛門の『伊豆諸島風土細覧』に述べられている。

『伊豆七島志』には、「伊難波嶼二海獺数千群聚シ、其鳴声四五里二聞ユ、新島ノ魚夫来テ之ヲ捕殺ス、肉ハ食フ可ク油ハ灯油トシテ冬凍ラズ」(戸羽山, 1967)、『伊豆諸島風土細覧』には、蘭灘波島は新島と三宅島の間にあるところから、「両島より年に一、二度取りに行くとも海鹿を取と漁がきかぬとて外人が嫌ふゆえ節々は行ざる也」などの記述がある。後者では、一種のタブーのようなものがあって、むやみにアシカを捕獲していたのではなかったふしを読み取れて興味深い。

新島郷土館にアシカを捕獲するために使用された鉄製の鉬が残されている(千葉, 1975)。こ

の銛は新島本村と式根島で使用され、明治時代まで大いに活用されていたという(段木, 1975)。神津島の恩馳島では棍棒による撲殺猟が行われていた(橋口, 1988)というが、この島が繁殖地であったからこそなし得た猟であろうと思う。式根島の海驢立鼻(アシカンダチ, 表1, No. 41)もまたアシカが多く集まっていたところとして知られ、アシカ猟の漁場となっていた(段木, 1976)。

明治の中期までは恩馳島に数多くのアシカが群棲して繁殖していたが、密漁がたたって姿を消した(桜井・松本, 1949)という。新島の漁業定書の一カ条として、「オンパン島の海馬(アシカのこ)は捕獲を禁ずる」むねの定めが明治初年に出されていた。それにもかかわらず絶えてしまったのは、当時の漁政の無政府状態のもとに行われた乱獲によると考えられている(千葉, 1975)。千葉県銚子や鴨川にあったアシカ島からも明治40年頃にアシカは姿を消した(西岡, 1949; 内藤, 1975)。和歌山県日高郡のアシカ島(表1, No. 33)へのアシカの回遊は明治10年頃途絶えたと言われ、ここでも乱獲が主因とみられている(真砂, 1987)。

ま と め

これまで述べてきたような記録を総合するならば、伊豆諸島の神津島や三宅島近海に散在する恩馳島、大野原島、蘭灘波島などの岩礁群島はアシカの一大繁殖地であったと考えられ、そこでは油を採るためや食用としてアシカが狩猟の対象とされてきた。しかし明治の中期から後期にかけて伊豆諸島およびその近海からアシカはほとんど姿を消したと考えられる。千葉(1975)が的確に指摘したように、そしてまた先報の結論(中村, 1989)としたように、アシカが消失したのは繁殖地および回遊先における乱獲がその主因と考えられる。

謝辞 本稿をまとめるに当たり、下記の方々(ABC順、敬称略)から文献その他の情報収集で多大なご援助をいただいた。記して衷心より御礼申し上げる。

池田哲夫(両津市郷土博物館)・井村哲生(歴史博物館・成巽閣)・伊藤徹魯(朝日大学歯学部)・岸上興一郎(横浜市教育委員会)・鈴木良明(神奈川県立博物館)・田名瀬英朋(京大瀬戸臨海実験所・水族館)・梅田武敏(東京都神津村教育委員会)・安室 知(横須賀市人文博物館)・柳平則子(相川郷土博物館)。

文 献

- 千葉徳爾, 1975. アシカとジュゴン. 水温の研究, 19(5): 32-36.
 段木一行, 1976. 伊豆諸島の歴史. 武蔵野郷土史刊行会.
 橋口尚武, 1988. 島の考古学. 東京大学出版会.
 池原宏二・伊藤年成・箕輪一博・中村幸弘, 1990. 新潟県下に漂着した海産哺乳類. 鯨研通信, (378): 27-40.
 伊藤徹魯, 1979. ニホンアシカ雑感. 哺乳類科学, (39): 27-40.
 金山正好(編・校訂), 1976. 伊豆諸島巡見記録集. 緑地社.
 金山正好(校訂・訳・解説), 1985. 南汎録—伊豆諸島巡見日記. 緑地社.
 川上健三, 1966. 竹島の歴史地理学的研究. 古今書院.
 小嶋芳考・渡辺 誠・奈良崎和典, 1978. 舩倉島シラスナ遺跡発掘調査報告. 石川県立郷土資料館*.

- 国分直一, 1975. 海上の道—海流・季節風・動物をめぐって. えとのす, (2): 21-33.
- 桑谷正昭・谷川健一(解題), 1968. 伊豆諸島風土細覧, 日本庶民生活史料集成第1巻, 603-661. 三一書房.
- 真砂久哉, 1987. 由良町海獺島に回遊したアシカ. くちくまの, (70): 45-49.
- 水野 祐, 1970. 日本民族文化史. 雄山閣.
- 内藤靖彦, 1975. 外房のアシカ島雑記. 鯨研通信, (282): 11-12.
- 中村一恵, 1989. ニホンアシカ—その分布と絶滅をめぐって. 日本の生物, 3(12): 27-33.
- 西村三郎, 1981. 地球の海と生命. 海鳴社.
- 西岡秀雄, 1949. 寒暖の歴史. 好学社.
- 西岡秀雄, 1972. 気候700年周期説, 寒暖の歴史. 好学社.
- NISHIWAKI, M., 1967. Distribution and migration of marine mammals in the North Pacific area. Bull. Ocean Res. Inst. Univ. Tokyo., (1): 1-64.
- 坂口一雄, 1980. 伊豆諸島民俗考. 未来社.
- 左古 隆, 1985. セツ島の近世胡擯獵. 舩倉島・セツ島(大島)遺跡詳細分布調査報告, 29-38. 石川県輪島市教育委員会.
- 桜井 保・松本 一, 1949. 神津島記. 著者刊.
- 戸羽山澣(修訂・編纂), 1967. 増訂豆州志稿・伊豆七島志. 名倉書店.
- 山中正実, 1983. 北海道沿岸におけるトド (*Eumetopias jubata*) の回遊に関する聞き取り調査. 哺乳類科学, (45): 121-129.
- 山下欣二, 1990. 近世古文献に見る海獣類(1) アシカ. 海洋と生物, 12: 230-233.
- (* は原著を見られなかったもの)